宮城県・田代島

にゃんこの島の「猫神社」

猫の手借りて震災復興？

「猫ブーム」と言われて久しいが、猫人気はいまだ衰え知らずだ。5月下旬、猫好きの間では有名な宮城県石巻市の田代島を訪れた。人の数より猫の方が多いという、いわゆる「猫島」は、全国にいくつかある。しかし、田代島はその中央に「猫神社」が鎮座し、大漁の守護神として「猫神様（美與利大明神）」が祀られているという点で、「猫島」の中でも際立った存在だ。　（菅野政弘）

小さな島に猫200匹

田代島は石巻港から南東へ約15キロメートルに位置する。島の周囲は約11キロ、面積は約3平方キロほどだ。島へ行くには、石巻市の離島航路を運航する網地（あじ）島ラインを使うのが最も便利。3月に新高速旅客船「シーキャット」（109トン、定員220人）が就航し、田代島までの所要時間が10分以上短縮された。旧北上川の河口に「中央」と「門脇」の2カ所の発着所がある。記者は無料駐車場が使える「門脇」から乗船した。周辺は東日本大震災の津波被害がひどかった場所で、現在は広大な更地となり、復興祈念公園の整備中だ。

田代島には大泊と仁斗田（にとだ）の二つの港があり、門脇から大泊港までが26分、さらに仁斗田港までなら34分の所要時間だ。「猫の数は仁斗田の方が多い」との情報を得て、仁斗田港で降りることにした。一緒に降りたのは20人ほど。竿をもつ釣り客も数人見られたが、大半は猫目当ての観光客のよう。港は整備され、岸壁は真新しい。離島といえども復興工事は進んでいるようだ。

「猫島」と聞くと、猫がうじゃうじゃいるような印象を受ける。事実、そのような写真がネット上やパンフレットに掲載されている。だが港で記者を迎えてくれた猫は、とりあえず1匹だけだった。スタスタとこちらの方に歩いてくる。田代島の猫は150匹、あるいは200匹以上ともいわれている。漁師の姿もなく、タイミングが悪くて猫が集まっている様子が見られないのだろうか。それもあるだろうが、そもそも猫は港だけでなく、島全域に散らばっているとのことだった。気まぐれな猫に、迎えに集まってくれなどと思うのはありえない「片思い」だろう。

さっそく、目当ての猫神社を目指して歩き出す。港から神社までは約1・7キロ。しばらく住宅地を歩くが、人影はさっぱりだ。明らかな空き家も多い。だが、塀の上や道ばたのあちこちに猫が座っていて、ふと気づくと足下にいたりする。門から人家を覗くと数匹の猫と目があったりもした。まぎれもなく「猫島だ！」と実感する。

住宅地を抜けると緩やかな長い坂道が続く。途中、「島のえき」という軽食がとれる店で休憩した。ここは猫関連の土産物も充実しており、猫好きにはたまらない。道すがら2人連れで歩く観光客4組と、時間を置いて1匹ずつ歩く猫、計10匹とすれ違った。観光客のうち2組は、すぐそれと分かる欧米系の外国人で、島の知名度はもはや世界的なようだ。

猫神社は思いのほか小ぶりで、鳥居も小さい。やはり猫サイズということか。賽銭箱を取り囲むように招き猫や、猫グッズがズラリ。中には名前を書いた猫の写真、ドル紙幣なども。単に猫が見たいというだけではない、参拝者それぞれの想いが伝わってくる。

神社の脇には、その由来が記してある。概略はこうだ。

「ある日、漁師がいかりを作るために砕石していたとき、その石片が猫にあたり死んでしまう。古くから猫は〝大漁を招く〟とされていたため、島の大課（総監督）だった現八興丸船主安部家が大変心を痛め、今後の猫の安全と大漁を祈願して、石造りの小祠を安置。猫を祀り猫神様として信仰を深めていった。安部家は代々神主を務め、現在でも毎年3月15日が祭日で、幟を立て、供物の鮪を供え、お神酒を献上、参詣している。また漁師たちも初漁には供物を供え参詣する…」

田代島で最初に猫が飼われるようになったのは、養蚕でカイコの天敵・ネズミを駆除するのが目的だった。江戸後期に漁師たちの番屋（作業小屋兼簡易宿泊所）がいくつか設置されるようになると、猫がエサを求めて港に集まるようになった。やがて漁師の間で猫の動作などから天候や漁模様を予測する風習が生まれたという。こうして島民と猫は持ちつ持たれつといった関係を築く。

東日本大震災から復興

だが、田代島の猫物語は近年、大きく動いた。きっかけは2011年の東日本大震災だ。島には10メートル強の津波が押し寄せ、特に漁業の設備は壊滅的被害を受けた。そこで復興を目指した地元かき養殖に携わる漁師と有志が一口支援基金のプロジェクトを立ち上げた。当初、参考にした他地域の同様なプロジェクトの様子から成否は見通せない状況だったが、田代島の支援基金はわずか3カ月で必要な資金を集めることができたという。

成功の要因は、猫好きの人々の心を動かしたことに尽きる。プロジェクトの名前を「田代島にゃんこ・ザ・プロジェクト」とし、田代島ならではのPRを展開したのだ。支援者は、猫が今後も田代島で安心して暮らすためには、島自体が復興して行かなくてはならないことを理解し、プロジェクトに賛同した。支援者には返礼として牡蠣が送られている。また基金の一部は観光や猫のためにも使われている。「島のえき」の運営などがそれで、病気の猫を保護・治療する場所も併設されている。

〝威力抜群〟の猫の手を借りて、復興に着手できた田代島だが、根本的な課題もある。島民の数が激減しているのだ。直近の国勢調査（2015年）で62人。しかし、地元の人の話によると、現在では30人ぐらいらしい。

かつては遠洋漁業の基地として栄え、千人以上の人口があり、1989年まで小中学校もあった。ところが、60年のチリ地震津波で出港前の船団が壊滅的な被害を受け、急速に衰退していったという。

江戸時代から漁業が盛んで、伊達藩の流刑地にも使われ、幽閉された政治犯が島民に教育を施したので、優秀な人材を輩出している。小さな島だが寺社の数も多い。地図でみるだけでも鹿島神社、松盛院、大六天神社、満蔵寺、満福寺、田代寺、稲荷神社…。縄文時代の貝塚や南北朝時代の史跡、文化財も少なくない。それだけ多くの賑わいがあったことが窺われ、往時を思えば今は消滅の瀬戸際ともいえる。

一方で、移住者もいる。そもそも田代島が猫島として知られるようになったのも、2006年に移住して民宿をはじめた夫婦がブログで島の様子を発信したのがきっかけだった。記者は猫神社を後にし、さらに約1キロ先の大泊港まで歩いたが、そこで3年前に夫婦で東京から移住してきたという高橋幸夫さん（65）の話を聞くことができた。

「今は農業をしていて、漁も教えてもらっています。元々料理人なので、自分が育てた食材や海の幸を使った料理を提供する店を出したい。田代島は古くから稲作が可能で、井戸からは今も良質な水が湧く。そして目前には世界三大漁場といわれる海が広がっています。かつて多くの人がいたということは、それを養うだけの潜在力があるということ。コンビニなどなくても、豊かな自然の中、自分の手で生命の力を感じながら生きる毎日に満足しています」

宮城県北部の登米市に生まれ、東京・中野区の新井薬師と山梨で蕎麦屋を開いていた高橋さんが、田代島にやってきたのはいろいろな縁に導かれて。息子さんはタイの女性と結婚しタイで暮らしている。お嫁さんは父親が日本人で小学校まで日本で暮らしていたため日本語に不自由しない。タイでそば屋を開く夢を持つようになり、高橋さんの店で修行し、高橋さんもそのつもりになっていた。

ところが、奥さんの知人から紹介された田代島になぜか引かれ、ここで古民家カフェを開くのが最後の仕事のように思えてきたという。その後の展開を聞くと、東日本大震災の犠牲者に呼ばれたのかもしれない。高橋さんの生家にも稲荷があったが、借りた家に稲荷が祀ってあり、訪ねてきた人に「稲荷に招かれた」と言われたという。

また、ある霊能者に、東日本大震災の津波で多くの人が亡くなった石巻市の日和山にある赤坂神社を復興する役割があると言われ、高橋さんは石の祠が残っている神社を掃除し、島の産物をお供えし、犠牲者の供養を続けている。

「東北学」を提唱している民俗学者の赤坂憲雄・学習院大学教授（福島県立博物館館長）は「被災地のいたるところで宗教が露出している」と語っていたが、同じ思いになる。

今や「猫好きの聖地」とまで言われ、観光客が増え続ける田代島だが、島の未来をみつめ地域に根をおろしている人々の活躍を願った。

門脇発着所のシーキャット

宿泊施設「マンガアイランド」もある

観光客に頭をなでられる猫。田代島の猫は人懐っこい

猫関連の土産物が並ぶ「島のえき」

島の中央にある猫神社

古民家カフェ福猫
お食事できます

移住者の高橋幸夫さん

神幸祭で鳳輦・神輿行列

天皇陛下の御即位祝う

神田明神

天皇陛下御即位御大典
奉祝 神田祭
HORIBA

千代田区神田淡路町2丁目付近を巡行する鳳輦・神輿行列＝5月11日

5月11日、東京都千代田区の江戸総鎮守神田明神（正式名称神田神社、清水祥彦宮司）で天皇陛下御即位御大典記念・神田祭の神幸祭が斎行された。神幸祭は御鍵渡しの儀で始まり、午前8時に出発を告げる神事、発輦祭が行われた。

晴れ渡った空のもと奉仕する人々が参列し、神幸祭の道中の無事を祈願した。約3000人が集まる中、宮司、式衆、氏子総代が参進、修祓の儀が始まる。宮司と共に参列者全員が神前に一拝。神輿に献饌、宮司が祝詞を奏上、宮司が玉串を奉って拝礼し、次いで氏子総代、地域代表が玉串を奉奠した。神饌を撤し、宮司と共に参列者全員が神前に一拝し、発輦祭は滞りなく修められた。

拝礼する清水祥彦宮司＝東京都千代田区の神田明神

江戸消防記念会の鳶頭衆による木遣りの高らかな声が響き渡り、「一の宮鳳輦」「二の宮神輿」「三の宮鳳輦」をはじめ、諫鼓山車や獅子頭山車などからなる行列が氏子108町会を巡り、神々の力によって各町会を祓い清めるために出発した。

行列は30キロの道のりを歩き、「附け祭」の行列も加わると数千人規模の大行列へと膨らむ。今年は新しい天皇陛下が即位されたこともあり、行列の先頭には「天皇陛下御即位御大典 奉祝 神田祭」の横断幕が神職によって掲げられた。

木遣りは作業唄で、元来は人々が一つの作業を複数で行う時に力を一つにまとめるためにうたわれたもの。鳶の木遣りも鳶職人の唄として生まれたが、町の火消しが鳶職人を中心として構成されていたので、火消しの唄として受け継がれてきたという。消防出初式のアトラクションでも見られ、火消しが梯子乗りで合唱する江戸木遣り唄が有名。

行列は各氏子総代が執り行う「献饌」、大手町の神田明神旧蹟地にある、将門命を祀る将門塚で「奉幣の儀」、日本橋両国旧御仮屋に立ち寄り、祭神に食事である神饌をお供えする「昼御饌」などの神事を行いながら巡行した。

そして秋葉原の電気街を巡行した後、夜7時過ぎに木遣りの威勢のいい歌声とともに大勢の人々が待つ神田明神に到着した。鳳輦・神輿を前に、巡行の奉告と感謝を捧げる、着輦祭が行われた。参列者は宮司と共に一拝、修祓の儀、献饌の後、宮司が祝詞を奏上。宮司が玉串を奉って拝礼し、次に氏子総代、地域代表が玉串を奉奠した。神饌を撤し、宮司と共に参列者全員が神前に一拝し、着輦祭は滞りなく修められた。木遣りの歌が春の夜に鳴り響き、各町内会、商工会の神輿が続々と到着していた。

神幸祭は5月9日の鳳輦神輿遷座祭で始まり、神幸祭、附け祭等を経て5月15日の例大祭まで続く「神田祭」の一つ。「神田祭」は「天下祭」として知られ、元和年中までは船渡御であった。

延宝年中までは毎年斎行されていたが、山王祭（千代田区・日枝神社）と隔年で斎行することになり、以後2年に1度の斎行が恒例となった。江戸時代を通じて全国的に有名な祭で「日本三大祭り」「江戸三大祭り」の一つ。

21年ぶり熊野那智神社「お浜降り」

被災地の復興を後押し

宮城県名取市

宮城県名取市の閖上（ゆりあげ）地区で、東日本大震災の犠牲者の鎮魂と復興支援への感謝を発信する「まちびらき」（実行委員会主催）が5月26日に行われた。九つの会場で多彩なイベントが繰り広げられたが、メインは熊野那智神社（井上幸太郎宮司）が21年ぶりに執り行った神事「お浜降り」だった。

閖上湊神社に到着したみこし

同地区は「日本一のアカガイ」などで知られる閖上漁港がある。津波で754人が犠牲になり、建物の多くは流出した。2014年に復興計画を住民主体で考える「閖上まちづくり協議会」が発足したが、現地再建か移転かをめぐり住民の合意形成が難航。他の被災地に比べ復興が大幅に遅れた経緯がある。事実、「まちびらき」を迎えたとはいえ、現在も多くの場所で土木工事が続いており、土砂や重機が目立つ。しかし、重要な道路や災害公営住宅が次々と完成し、昨年は閖上小中学校が開校。約1200人が現地再建を果たした。今年になって飲食店が軒を連ねる「かわまちてらす閖上」が開業。公民館の復旧工事も完了した。計画人口は震災前の4割弱にあたる約2100人だが、市は来年にも「復興達成宣言をしたい」というところまできた。

復興しつつある姿をPRしたいと今回の「まちびらき」だが、目玉は [illegible] 「お浜降り」。[illegible] 今回は増田神社、閖上湊神社をはじめ地区住民の協力を得て実現した。

熊野那智神社の創建は養老3年（719）。祭神は羽黒飛龍神、熊野夫須美神をはじめ6柱の神々。当初は羽黒大権現のみを祀っていたが、名取老女が熊野三社を勧請したことにより、那智の分霊を合祀して「熊野那智神社」となった。[illegible] 実際に担いで感触を確かめた。当日は朝6時に神事が行われ、みこしは約1キロ離れた熊野那智神社仮宮を出発。[illegible] についての説明がアナウンスされた。[illegible] と、現在、熊野那智神社のある高舘山の方角へ光を放ったという。[illegible]

年配の担ぎ手によると「昔は海へ放り投げるような荒々しいものだったようだ」という。また若手の担ぎ手は、[illegible] などと語った。

漁港では神事と合わせ、閖上太鼓が威勢よく鳴り響き、9年ぶりに復活した「大漁船パレード」[illegible] 大漁旗をはためかせた漁船12隻が出港した。[illegible] 苦しい状況の中だったが、街の復興のために [illegible] わるものだった。

「まちびらき」の人出は推定約2万人で、大いに賑わった。[illegible] 「お浜降り」は住民たちの心の拠り所として、復興を後押ししている。

閖上漁港で神事を執り行う熊野那智神社の井上幸太郎宮司